

「弱さを誇りたい」

「わたしは弱いときにこそ強いからです」。私は、この御言葉を、敦賀教会幼稚園の生活発表、そのオンライン配信の映像を通して聴いていました。幼稚園の生活発表という大切な行事を前に、インフルエンザに罹ってしまい、さあ、どうしようかと。熱冷ましの薬だけ飲んで、何事も無かったように当日を迎えようかとも考えました。でも、もしも、私が子ども達の前に立つことで、インフルエンザがうつってしまったら……。コロナ禍を経て、そういう感覚も強くなってしまいました。どちらを選んでも、心苦しいことに変わりはない。幼稚園の大切な行事を欠席してもツライし、感染リスクを抱えたまま人前に出ることもツライ。そもそも、インフルエンザになんか罹らなければ良かったのに。日頃の体調管理をしっかりとっておけば、先にインフルエンザに罹った家族と距離を取っておけば……。とかなんとか、色々と考えては 30 分おきくらいに体温を測り、徐々に高まる数値に憂鬱な気分になってしまいました。

「わたしは弱いときにこそ強いからです」という御言葉は、幼稚園で、この 2 月に子ども達と一緒に憶えているものです。不思議と、この御言葉は、自分が弱くない時の方が言い易いですね。自分の弱さに自覚がない時、自分以外の誰かの弱さを想像しながら、「大丈夫、大丈夫、弱いことは悪いことじゃない」と諭すような気持ちで、「弱いときにこそ強いからね」と、然したる根拠もなく、ただ聖書がそう言うからという理由で、この御言葉を用いることがあります。

しかし、本当に自分が弱さをひどく自覚する時、この御言葉は、全然違う響き方をします。まずは否定から入りますね。弱いからできないこと、許されないこと、実現できないことを目の当たりにして、もっと強かったらできたのに、許されたのに、実現できたのに、という願望が強くなりま

す。身体が弱いから、免疫力が弱いから、日頃の体調管理が弱いから……。というのは、まあ、私のここ最近の心の揺らぎが原因の、弱音、ですけどね。でも、冷静に考えて、大事な日に体調不良で休むことの影響を、無視できないことがあります。生活発表の日、インフルエンザに罹ったのが、園長である私ではなく、子ども達の演技を導く担任の先生だった場合、どうしただろうか、ということは決して簡単な話ではありません。もちろん、そうなった場合の対応策をいくつか考えてはいますが、園長不在よりも、もっと大きな影響が出ていただろうことは容易に想像できます。

人のあらゆる弱さについて、人の知恵や工夫で補えるなら、それは大したことありません。「まあ、大丈夫だよ」と言って何とかなら、問題はない。でも、どんなに調整を施しても補え切れない場合もあります。国の威信をかけた競技大会を欠場すること、莫大な経済効果を背負った音楽祭をキャンセルすること、国家規模の利益を約束する会議を欠席すること。熱が出まして、ちょっと調子が悪くて、心がツラくて、気持ちが耐えられなくて……。そんな理由じゃ逃れることのできない局面は、現実として存在しています。まあ、そういう局面に置かれる人は、限られてはいると思います。でも、じゃあ、「弱いときにこそ強いからです」という御言葉は、地位と立場によって、当てはまる場合と、そうじゃない場合があるということなののでしょうか。神様の御言葉が及ばない局面があるのか、という。

これは、なかなか難しい問題です。「むしろ、大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう」と聖書は言います。しかし、自分の競合相手に、そんなことができますか？ 戦争中に、そんなことができますか？ 弱さを出すことは、相手が有利になるように手助けすることです。別に、戦争なんて悲惨な出来事じゃなくても、会社の営業をしていたり、幼稚園の運営をしていたり、する中で、弱さを見せられない場面というのは、普通によくあります。虚勢を張って、嘘八百で、はったりをかまして事を乗り越えることもあります。今回の、私のインフルエンザにしても、まさに嘘八百で乗り越え

ようと考えていました。それが、世の知恵だ、処世術だ、社会における大ぴっらにはできない常識だと言われれば、確かにそうだと思います。

でも、私たちが目指す世界って、そういう世界なのでしょうか。熱が出ても、感染リスクを孕んでも、出張っていくことを良しとする世界なのでしょうか。弱さを包み隠して、虚勢を張って、いや虚勢を張り合って、虚実入り乱れた世界を創ることが理想なのでしょうか。はったりをかまして、それを賢い正義と捉えて、嘘をついたことを肯定する世界が、あるべき世界なのでしょうか。

もちろん、今、私が言っていることは、世間ズレしているでしょう。現実社会で重宝される手練手管とは乖離していると思います。でも、神様が望み、イエス様が諭し、パウロさんが、今日の手紙の文章を通して言わんとしていることは、その非常識で世間ズレしている、理想論であると私は思います。「それゆえ、わたしは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあっても、キリストのために満足しています」。普通に考えて、克服し、乗り越えるべき状態にあっても、パウロさんは、「キリストのために満足しています」と言います。この聖書的事実を、私たちは受け止めないといけません。

弱い人、いますよね。弱い時、ありますよね。弱い身体、仕方ないじゃないですか。弱い心、そこにこそ神様は宿ってくださるんですよね。・・・強い内はいいでしょう。強さを誇れる内は、今日の聖書の御言葉は、戯言です。でも、どんな強靱な人も、強硬な人も、常に、永久に強くいられるわけではありません。強い人は、強い時に、強いことを頻繁に社会に対して発信するので、その印象は強烈に残ります。しかし、弱くなったことを、弱い時に頻繁に発信することはないので、弱い人の情報は、いつも多くありません。弱い人の情報を欲していないという、世間の要求も影響しているでしょう。一方で、そのところ、聖書は、弱さをそのままに伝えている非常に貴重な書物ですね。人の失敗、過ち、罪の見本カタログのような聖書です。それが、聖書の良いところです。

現実社会は、なかなか弱さを誇ることはできません。それは、組織を正常に運営するために、競合相手と渡り合っていくために、悪意ある他者から自分を守るために、というのっぴきならない理由があるからです。でも、私たちの目指すべきは、理想とすべきは、どこなのか、ということは忘れないでいたいと思います。強いことが正義であり、強いことが称賛されることが、私たちの理想なのか。弱さを認めて、お互いにありのままの姿で向き合える社会が理想なのか。

恥ずかしくて、隠したいような弱さを、神様の御名前によって誇れるような世界になりますように。そして、その弱さに神様の御力が加わり、虚勢を張って頑張るよりも、さらに素晴らしい結果を得られるような世界になりますように。「みこころの天になるごとく、地にもなさせたまえ」。主の祈りの一節が、空に消えるのではなく、明日の私達の喜びと幸いとなりますように。そう願うものであります。お祈りを致します。

神様。

今日も私たちのために尊い安息日を備えてくださり、また、この礼拝堂へと導いて頂き、感謝致します。あなたは、私たちにそれぞれ強さと弱さをお与えになりました。ある人にとってみれば、他者の強さが眩しく見え、また、ある人にとっては他者の弱さが苛立たしく映ることもあります。しかし、あなたは何かの必要があって、それぞれに賜物をお与えになったのだと信じます。自分の弱さを疎ましく思うことなく誇れるように、他者の強さを素直に喜び称えられるように、私たちの心を整えていてください。また、弱さから学び、あなたへの信頼を篤くすることができますように。どうか、私たちの歩む道を支え導いてください。

このお祈りを、我らの主イエス・キリストの御名前によって、あなたの御前にお捧げ致します。